日本の古典 より

古事記

天地初めて發けし時、高天の原に成る神の名は天之御中主の神。

次に高御産巣日の神。

次に神産巣日の神。

此の三柱の神ぞ、並びに獨り神と成り坐して身を隱したまふ。

古事記

天地　初めて發けし時、
高天の原に　成る神の名は
天之御中主の神。
次に　高御産巣日の神。
次に　神産巣日の神。
此の三柱の神ぞ、
並びに　獨り神と成り坐して　身を隠したまふ。

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふものありけり。
野山なる竹をとりて、
よろづの事につかひけり、
名をば、さるきのみやつこといひける。
その竹の中に、もと光る竹、一筋あり。
あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる人、
いとうつくしうて居たり。

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふものありけり。
野山なる竹をとりて、
よろづの事につかひけり、
名をば、さるきのみやつこといひける。
その竹の中に、もと光る竹、一筋あり。
あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる人、
いとうつくしうて居たり。

翁　いふやう、

「我　朝ごと　夕に、見る　竹の中に、おはするにて　知りぬ。子になり給ふべき人　なんめり。」

とて、手にいれて、いゑに　もてきぬ。

妻の女に　あづけて、養はす。

うつくしきこと、かぎりなし。

いと　おさなければ、籠にいれて　やしなう。

竹取の翁、　なを竹を　とるに、この子を　見つけてのち、

とる竹に、節をへだてて、

ことに、黄金ある竹、見つくる事　かさなりぬ。

かくて　翁、やうやう　ゆるらかに　なり行く。

翁　いふやう、

「我　朝ごと　夕に、見る　竹の中に、おはするにて　知りぬ。
子になり給ふべき人　なんめり。」

とて、手にいれて、いゑに　もてきぬ。

妻の女に　あづけて、養はす。

うつくしきこと、かぎりなし。

いと　おさなければ、籠にいれて　やしなう。

竹取の翁、なを竹を　とるに、この子を　見つけてのち、

とる竹に、節をへだてて、

ことに、黄金ある竹、見つくる事　かさなりぬ。

かくて　翁、やうやう　ゆるらかに　なり行く。

土佐日記

紀貫之

男もすなる日記といふものを、女もしてみむ、とて、するなり。それの年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の刻に、門出す。そのよし、いさゝかに物に書きつく。

土佐日記

紀貫之

男もすなる　日記といふものを、
女もしてみむ、とて、するなり。
それの年の　十二月の二十日あまり
一日の　日の　戌の刻に、門出す。
そのよし、いさゝかに
物に　書きつく。

ある人、県の　四年五年はてて、例の事ども　みな　し終へて、解由など取りて　住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。

年来　よく比べつる　人々なむ、別れ難く　思ひて、日しきりに、とかくしつゝ、のゝしるうちに、夜更けぬ。

廿二日に、和泉の国まで、と、平らかに　願立つ。藤原のときざね、船路なれど、馬の　はなむけす。上中下、酔ひ飽きて、いと　怪しく、潮海のほとりにて、あざれあへり。

ある人、県の　四年五年はてて、例の事ども　みな　し終へて、
解由など取りて　住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。
かれこれ、知る知らぬ、送りす。
年来　よく比べつる　人々なむ、別れ難く　思ひて、
日しきりに、とかくしつゝ、のゝしるうちに、夜更けぬ。

廿二日に、和泉の国まで、と、平らかに　願立つ。
藤原のときざね、船路なれど、馬の　はなむけす。
上中下、酔ひ飽きて、いと　怪しく、
潮海のほとりにて、あざれあへり。

枕草子

清少納言

春は曙。
やうやう しろくなり行、やまぎは すこしあかりて、
むらさきだちたる雲の ほそく たなびきたる。

夏はよる。
月のころは さら也、
闇もなを、ほたるの 多く とびちがひたる。
又、たゞ一二など、
ほのかに うちひかりて 行も おかし。
雨などふるも、おかし。

枕草子

清少納言

春は曙。
やうやう しろくなり行、やまぎは すこしあかりて、
むらさきだちたる雲の ほそく たなびきたる。
夏はよる。
月のころは さら也、
闇もなを、ほたるの 多く とびちがひたる。
又、たゞ一二など、
ほのかに うちひかりて 行も おかし。
雨などふるも、おかし。

秋は夕暮。

夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、

からすの寝所へ行とて、

三四、二みつなど、

とびいそぐさへあはれなり。

まいて雁などのつらねたるが、

いとちいさくみゆるは、いとおかし。

日入はてて、

風の音むしの音などいとあはれなり。

秋は夕暮。
夕日のさして　山のは　いと　ちかう　なりたるに、
からすの　寝所へ行とて、
三四、二みつなど、
とびいそぐさへ　あはれなり。
まいて　雁などの　つらねたるが、
いと　ちいさく　みゆるは、いと　おかし。
日入はてて、
風の音　むしの音など　いと　あはれなり。

冬は つとめて。
雪の ふりたるは いふべきに あらず。
霜の いと しろきも、
また さらでも、
いと 寒きに、火など いそぎ おこして、
炭もて わたるも いと つきづきし。
昼になりて、
ぬるく ゆるび もていけば、
火桶の火も しろき灰がちに なりて、わろし。

冬は つとめて。
雪の ふりたるは いふべきに あらず。
霜の いと しろきも、
また さらでも、
いと 寒きに、火など いそぎ おこして、
炭もて わたるも いと つきづきし。
昼になりて、
ぬるく ゆるび もていけば、
火桶の火も しろき灰がちに なりて、わろし。

源氏物語

紫式部

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬがすぐれてときめき給ふ有けり。

源氏物語

紫式部

いづれの御時にか、
女御、更衣
あまたさぶらひ給ひける中に、
いと やんごとなき際には あらぬが
すぐれて ときめき給ふ 有けり。

はじめより 我は と 思ひ上がり たまへる 御方々、
めざましき物に おとしめ そねみ給ふ。
同じ程、
それより げらうの 更衣たちは まして 安からず。
朝夕の 宮仕へにつけても 人の心をのみ 動かし、
うらみを 負ふ積りにや ありけむ、
いと あづしくなりゆき 物心ぼそげに 里がちなるを、
いよいよ あかず あはれなる物に 思ほして、
人の譏りをも え憚らせ 給はず、
世の ためしにも 成ぬべき 御もてなしなり。

はじめより　我は　と　思ひ上がり　たまへる　御方々、
めざましき物に　おとしめ　そねみ給ふ。
同じ程、
それより　げらうの　更衣たちは　まして　安からず。
朝夕の　宮仕へにつけても　人の心をのみ　動かし、
うらみを　負ふ積りにや　ありけむ、
いと　あづしくなりゆき　物心ぼそげに　里がちなるを、
いよいよ　あかず　あはれなる物に　思ほして、
人の譏りをも　え憚らせ　給はず、
世の　ためしにも　成ぬべき　御もてなしなり。

方丈記

鴨長明

ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、
シカモ モトノ水ニ アラズ。
澱ニ 浮カブ ウタカタハ、
カツ消エ カツ結ビテ、
ヒサシク 留マリタル タメシナシ。
世中ニ アル人ト 栖ト、
又 カクノ ゴトシ。

タマシキノ　都ノ　ウチニ棟ヲナラベ　甍ヲアラソヘル、
貴キ　賤シキ人ノ　住マヒハ、世世ヲ　経テ尽キセヌ物ナレド、
是ヲ　マコトカト　尋レバ、昔シ　アリシ家ハ　マレナリ。
或ハ、去年　焼ケテ　今年　作レリ。
或ハ　大家　ホロビテ　小家トナル。
住ム人モ　是ニ同ジ。
トコロモ変ラズ　人モ　多カレド、
イニシヘ　見シ人ハ、
二三十人ガ中ニ　ワズカニ　一人・二人ナリ。
朝ニ死ニ　夕ニ　生ルル、ナラヒ、タダ　水ノ泡ニゾ　似リケル。

平家物語

祇園精舎の　鐘の声、
諸行無常の　響あり。
娑羅双樹の　花の色、
盛者必衰の　ことはりを　あらはす。
奢れる人も　久しからず、
唯　春の夜の　夢のごとし。
たけき者も　遂には　ほろびぬ、
偏に　風の前の　塵に同じ。

遠く異朝を　とぶらへば、
秦の趙高・漢の王奔
梁の周伊・唐の禄山
是等は　皆　旧主先皇の　政にも　従はず、
楽しみを　きはめ、
諫をも　思ひいれず、
天下の　乱れむ事を　さとらずして、
民間の　愁る所を　知らざッしかば、
久しからずして、　亡じにし　者ども也。

徒然草

吉田兼好

（序段）

つれづれなるまゝに、
日ぐらし　硯に　向かひて、
心にうつりゆく　よしなしごとを
そこはかとなく　書き付くれば、
あやしうこそ　物狂おしけれ。

おくのほそ道

松尾芭蕉

月日は 百代の 過客にして、
行かふ 年も 又 旅人也。
舟の上に 生涯を うかべ
馬の口とらえて 老を むかふる物は、
日々 旅にして、旅を 栖とす。
古人も 多く 旅に 死せるあり。

東海道中膝栗毛

十返舎一九

序

箱根八里の 長持唄には、
猛き 宰領の 心を和らげ、
竹に 雀の 馬士唄には、鬼殺を 爛せしむ。
是 その歌の 徳利酒、呑や 謡の 旅衣、
都をさして 行がけの 駄賃帳を 繰返し、
筆の建場に 雲駕の、息杖をして 忍いやらやつと、
書編たる 東海道、五十三次